



詰めかけた観衆にお手振りをされる天皇皇后両陛下



フジビュースタンド玄関で武豊騎手、横山典弘騎手がお出迎えした



競馬場を後にされる際、相馬野馬追、チャグチャグ馬コの関係者がお見送りした



レース後、スタンド前で下馬し、天皇皇后両陛下に敬礼するミルコ・デムーロ騎手



馬場でご披露したチャグチャグ馬コ



馬場でご披露した相馬野馬追の行列



天皇皇后両陛下が東京競馬場へ行幸啓される

東日本伝統馬事芸能、第146回天皇賞・秋

10月28日(日)、天皇皇后両陛下が東京都府中市の東京競馬場へ行幸啓され、近代競馬150周年記念事業として開催された東日本伝統馬事芸能および第146回天皇賞・秋(GI)をご覧になった。

天皇皇后両陛下が天皇賞をご覧になるのは、平成17年の第132回(優勝馬ヘヴンリーロマン)以来7年ぶりのことで、現在の天皇賞が設けられた昭和12年以降では二度目のこととなった。両陛下は皇太子皇太子妃であった昭和61年、英国のエジンバラ公フィリップ殿下とともに東京競馬場にお越しになったことがあり、また翌62年にも東京競馬場で第96回天皇賞・秋(施行50周年記念、優勝馬ニッポータイオー)をご覧になられている。天皇皇后両陛下は競馬場にご到着のち、フジビュースタンド玄関で武豊騎手、横山典弘騎手らの奉迎をお受けになってからスタンド8階フロアに上がられ、各国大使、競馬関連団体の関係者等が奉迎する中を進まれて、貴賓室へご入室された。同バルコニーからは先の東日本大震災で被災した東北地方の伝統馬事芸能である相馬野馬追(福

島県)、チャグチャグ馬コ(岩手県)の行進を観衆とともにご覧になったのち、天皇賞・秋のレースをご覧になった。熱心にレースをご覧になった両陛下は、優勝したエイシンフラッシュに騎乗したミルコ・デムーロ騎手がスタンド前で下馬してヘルメットをとり、右膝をつけて深々と一礼した際には笑顔で祝福され、盛んな拍手を送られた。競馬場を後にされる際には、奉送した相馬野馬追、チャグチャグ馬コの関係者に東日本大震災のことを尋ねられ、その労をねぎらわれた。

○JRA日本中央競馬会・土川健之理事長
「天皇皇后両陛下におかれては、近代競馬150周年記念事業として開催いたしました東日本伝統馬事芸能、および第146回天皇賞・秋競走をご覧のため、東京競馬場に行幸啓を賜りました。このことは、私たち中央競馬関係者にとっては誠に喜ばしく、光栄なことであり、今後においても、心を新たに、中央競馬の一層の発展を目指し、全力で精励してまいります」



ミルコ・デムーロ Mirco Demuro
1979年1月11日、イタリア生まれ。33歳。94年見習騎手免許を取得。97年から00年までイタリアリーディングジョッキーに輝く。99年秋より短期免許にてたびたび来日。主な勝ち鞍は03皐月賞・日本ダービー(ネオユニヴァース)、04皐月賞(ダイワメジャー)、08ジャパンC(スクリーンヒーロー)、10有馬記念・11ドバイワールドC(ヴィクトワールピサ)、12天皇賞・秋(エイシンフラッシュ)など。JRA通算2048戦310勝(2012年11月11日終了現在)。

幹夫さんみたいにやりたかったけど、
スベシヤルな形で敬意を表したかった

ヘルメットを脱ぎ、天皇后両陛下に向け、頭を垂れる。観客席からは「おおっ」という感心とも感嘆ともとれる声が上がると、しばし、下げた頭をあげると、待っていたかのように馬が歩き出した。7年前のそんな様子を映像でチェックしたミルコ・デムーロ。「素晴らしいと感じた」

第146回天皇賞・秋。各騎手にはJRA職員から「勝ったら天皇后両陛下の前で頭を下げる」との示達があったと言った。デムーロはその言葉を受け、

7年前の映像をチェックしたのだ。「自分もそうできれば良いな……」という思いを胸に、ゲートへ向かったと言う。鞍下にはエイシンフラッシュ。2010年のダービー馬であり、そのダービー以来、勝ち星から遠ざかっている馬だ。デムーロがレースで同馬に跨るのは、これが初めてだった。しかし、調教では2週にわたって乗っていた。

「一週前追い切りでは折り合いを欠いたけど、最終追い切りは我慢して走り、最後は良い脚を使ってくれた」
状態がアップしているという手応えを感じた。その上で、調教師の藤原英昭とも作戦

を練った。そして……。「スタートしたら作戦通りの位置をとれた」
終始インコースを回るのも作戦通りだった。コースロスがなくなるのは勿論だが、理由はそれだけではなかった。いや、むしろもっと大きな理由があった。外を回るよりも馬群の中にいる方が闘志を燃やすというエイシンフラッシュの気性を配慮してのコース取りだった。
「最後はヴィクトリロードが開いた。ラッキーだったね」
そう言う。逃げたシルポートが一気に後退していたら前が詰まった可能性もあったことを思えば、確かにラッキーだった面もあるだろう。しかし、シルポートの逃げはハイペースが身上。当然、馬群は縦長になり、内外がバラける可能性も高くなる。だからこそインを突いても前が詰まらないという確信を持っていたのではないだろうか……。
「シルポートが下がりがら外へ行ったから最後まで内を突く形になったけど、真っ直ぐ下がってきたら1頭分、外へ出せばよかっただけ」
シルポートの更に外にはカレンブラックヒルとダイワファルコンがいた。果たしてシルポートの外、つまりシルポートとカレンブラックヒルの間を割ることは本当に出来たのか？
「ダイジョーブ」
デムーロは余裕とばかりに笑いながら日本語で答えた。
「運」を作戦で引き寄せて、デムーロは天皇后両陛下に敬礼する資格を得た。

日本を愛するイタリア人の畏敬の念

天皇賞・秋でエイシンフラッシュを久々の勝利に導き、天皇后両陛下の前で最敬礼したのはイタリア人騎手のM・デムーロ。彼がどんな想いを胸にこの一戦に臨み、そしてあの振る舞いに至ったのか、その心情に迫ってみた。

平松さとし=文
text by Satoshi Hiramatsu

ミルコ・デムーロ

「ヒーローインタビュー」

「松本幹夫さんみたいにやりたかったけど、何かもつとスベシヤルな形で敬意を表したかった。そのためには馬から下りてやるのがベターだと思った」
最敬礼した瞬間、デムーロは「ベリーベリーハッピーナキモチ」になった。日本でのGI勝ちも久しぶりなら、今年が主戦場としたイギリスで苦戦を続けてきたという背景もあった。それだけに、天皇后両陛下に最敬礼できたことが嬉しかった。
その後は両手でハートマークを作り、観客席にそれを掲げた。思えば、昨年3月、大震災に打ちひしがれる日本列島に、ドバイから朗報を届けたのもデムーロだった。当時は、第二の故郷である日本のために涙を流してくれた。彼はイタリア人だが、日本人以上に日本人の心を持つジョッキーだ。そういう意味では、天覧競馬を勝つに相応しい存在だったのではないだろうか……。
天覧競馬を勝つに相応しい騎手の態度や言葉とは？
今回のレース前「天覧競馬を外国人騎手に勝たすわけにはいかない」と言っていた日本人騎手を私は知っている。しかし、彼はこの結果を受け、どう感じただろうか……。デムーロの最敬礼をみて、「ミルコに勝たれたなら仕方ない」と思ったのではないだろうか……。ミルコ・デムーロの、畏敬の念を表す態度や言葉を見たり聞いたりしていると、そう思わずにはいられない。
(文中敬称略)

